検討課題に対する専門委員会委員の意見　資料3

2　社会の変化と多様な進路志望に対応する学科･コース等の在り方（第2専門委員会）

検討課題	具体的な検討項目	検討会議委員からの関連意見
⑥学科･コース等の今後の方向性	（ア）各学科･コース及び系列の検証 （･専門学科･コース及び総合学科の系列について、これまでの成果と課題についての検証） 【普通】	●1　全日制普通高校に、学年1学級のみ存在する、理数科、英語科、外国語科、美術科、人文科等の「特色ある学科」は、スポーツ科学科を除いて将来的に廃止する。 2　それら「特色ある学科」は、1校に集約し、新しい形の、上級学校への進学を目指す専門高校とする。 3　上記の専門高校は、県総合学校教育センター（あるいは連携に協力してくれる大学）に近接する高校とし、センター（大学）の施設や人材を活用する。 4　上記の専門高校には、情報処理技術の習得と資格取得を目指す学科の新設も考えられる。 5　特色ある教育は、奇をてらった学科の新設や出口のない学科の新設ではなく、各校の教育内容の充実と豊かさで実現する。 ●1　英語科について 現在3校あるうちの2校について聞きました。どちらも、高校入試では倍率が1倍を割っていて、人気がなくなっているのではないかということでした。英語科に入ってきた生徒は目的意識を持ってきた生徒と第2、3志望で入ってきた生徒が1クラスの中に混在しているので指導が大変だ、ということです。せっかく英語に特化した授業編成（ＡＬＴの活用や英語の時間数が多い）をしてもそれに苦痛を感じる生徒も中にいるようだとのことでした。 2　人文科について 現在2校あるうちの1校について聞きました。設立のねらいは文系の大学進学率を高めるためでしたが、そのような目標を持って入学してこない生徒もいるということでした。　2の英語科についてで記した内容とほぼ同じで、目的意識を持ってきた生徒と第2、3志望で入ってきた生徒が1クラスの中に混在していることに加え、学力の差もかなりあるようで、人文科の特色を十分に活かした授業ができていない面もあるのではないかということでした。ただ、しっかりとした目的意識を持って入学し、途中で理系等への進路変更もなく達成感を持って卒業していく生徒も確かにいるということです。 3　理数科について かつては特色ある学科の代表的な存在であった理数科も、現在募集停止が決まっていないで残っているのは県内で1校だけですが、その学校では地域の中学校のトップの生徒を集める科として機能しているとのことです。ただ、中学校への説明では理数科というより、文系への大学進学も含め、難関大学進学等を目指す「特進クラス」という感じでイメージしてもらっているとのことでした。よって、授業も理数教科に特化しているわけではないとのこと。ちなみに今春現役で東大に合格した2名は理数科に所属していたそうです。私見ですが、全国的に理数科離れ（理数科嫌い）が進んでいる中、県内でも理数科がなくなっていくのは非常にさびしい感じがします。

2　社会の変化と多様な進路志望に対応する学科･コース等の在り方（第2専門委員会）

検討課題	具体的な検討項目	検討会議委員からの関連意見
⑥学科･コース等の今後の方向性	【農業】	● 農業教育の分野から学科やコースの今後について、特に各学科･コースの及び系列について考えてみたいと思います。 1　農業高校における農業教育と学科との関係 農業高校おける農業教育と学科について次のように分類すると、学校間により学科名称の差はあるものの教育内容と学科のつながりを関連づけ分類することができる。 ※分野の分類は、高等学校学習指導要領解説農業編H12年3月による ※学科名は平成18年度入学生による ①食料供給分野 津軽地区⇒生物生産科（五農）、生物生産科（柏農）、農業経営科（弘実） りんご科（藤崎） 県南地区⇒植物科学科（三農）、動物科学科（三農）、生物生産科（名農） 園芸科学科（名農） ②環境創造と素材生産分野 津軽地区⇒林業科（五農）、農業土木科（五農）、農業機械科（柏農） 環境緑地科（柏農） 県南地区⇒農業機械科（三農）、農業土木科（三農） ③バイオテクノロジー分野 津軽地区⇒食品化学科（五農）、食品科学科（柏農） 県南地区⇒なし（あるとしたら七戸高校食品科学系列） ④ヒューマンサービス分野 津軽地区⇒生活科学科（五農）、生活科学科（柏農） 県南地区⇒生活科学科（三農）、生活科学科（名農）、農業経済科（三農） 2　募集生徒数とＨＲ数（平成18年4月現在） ①津軽地区⇒470人（13ＨＲ） ②県南地区⇒315人（9ＨＲ） 3　青森県の産業構造 ①就業人口　第1次産業　103,735人（農水） 第2次産業　185,571人 第3次産業　437,142人 ②世帯数　総世帯数　506,540世帯 農家数　70,301世帯 林家数　20,079世帯 漁業世帯数　8,477世帯

2　社会の変化と多様な進路志望に対応する学科･コース等の在り方（第2専門委員会）

検討課題	具体的な検討項目	検討会議委員からの関連意見
⑥学科･コース等の今後の方向性	【農業】	●　4　青森県の農林行政（地域農業の特色） ①津軽地区⇒東青⇒都市近郊型農業（野菜･花き） 西五⇒大規模農業（稲作･野菜･花き） 中南⇒集約型農業（稲作･りんご） ②県南地区⇒上北⇒大規模農業（稲作･露地野菜･畜産） 三戸⇒集約型観光農業（果樹･野菜･花き） これら産業構造や世帯数の面からも、青森県には農業高校が必要であり、各地域固有の農業形態があるので、地域の農業形態を網羅し地域農業に本当に必要な特色ある農業高校でなければ意味がないと思います。 農業高校は、地域の農業の担い手（職業人）育成と農業分野に固有の価値観や勤労観を有する人材（社会人）の育成という二つが目的であります。 そのためには青森県の農水行政と教育行政がうまくリンクしなければならないと考えます。青森県の主力産業は、農水などの第一次産業と言われていますが、第一次産業を支えていくためには専門高校として農業高校はその独自性と出口（卒業後の進路）について、これまでを検証する必要があります。 残念ながらこれまで学科やコースについて、卒業生の追跡調査を行うなどして、本当にその学科が必要なのか調べたことは少なく、また地元産業界と意見交換およびそれを反映した学校学科作りが希薄だったのではないでしょうか？。農業の二つの目的である、職業人と社会人を育成するためには、学校教育はもちろんですが、卒業後の出口が大切であり、その学科で何を学んで、何を身につけることができるのか、周知する必要があります。 同時に県の農林行政（政府は、H17年3月に「食料･農業･農村基本計画」を見直し、特に「農業の持続的な発展に関する施策、いわば従来の家族型農業経営を家族型農業経営＋法人経営＋集落営農経営とし、意欲ある担い手の支援の集中化や集落営農の育成･法人化の推進などにより農業構造を変えようとしています）も政府の方針と同様の方向性を出しております。よって農林行政と教育行政は互いにリンクさせる必要があり、現状を打破しなければならないない。 これらのことから、農業高校では地域の農業形態、志望者、適切な学科やコースについて、そのあり方を検討し方向性を出し、大胆な学校の統廃合を含めた学科の再編の必要であると考えています。 他の専門高校においても、同様なことがいえるのではないでしょうか。 農業教育の分野から学科やコースの今後について、特に各学科･コースの及び系列について考えてみたいと思います。

2　社会の変化と多様な進路志望に対応する学科･コース等の在り方（第2専門委員会）

検討課題	具体的な検討項目	検討会議委員からの関連意見
⑥学科･コース等の今後の方向性	【工業】	●　工業高校においては、専門学科は最初、機械、電気、建築･土木系が設置され、工業技術の進展とともにその学科も細分化、増設されてきた。また中堅技術者の育成を目指してきたため、就職に主眼を注いできた。そのため、不況時においても、就職は普通高校に比べ大幅に確保されている。特に機械、電気系においては好･不況に左右されず工業高校生の採用は維持されてきた。製造業において、専門性を主体とする企業では、その専門に合致した基礎学力が必要とされる業種もあり、専門学科は成果を上げてきたと言える 　一方で工業高校でも進学者が卒業者の4割に及び、進路先も多様になってきた。企業においても大卒の採用へのシフトや企業内での人材育成が重視されるようになり、日本社会にも活力が戻ってきた。工業高校が設置された当時と大きく社会状況も異なり、学校教育自体の果たす役割も大きく変容してきた。より高度技術･技能が求められる社会に対応するために、専門的な知識を早期より学び、将来のスペシャリストとして育てるための工業教育を継続することが重要である。 しかし技術立国と言われた日本でも理工系離れが進み、「ものづくり」への関心が薄れてきた。このため文科省でもこれらに対する施策を展開している。 　このような中で、本県が工業教育の分野において、どのような人材づくりを進めていくか、工業高校の在り方の再定義が課題と考える。この中で新しい学科の必要性や将来につながる新しいタイプの高校の可能性が見えてくるのではないだろうか。 ●　工業専門学科について 工業高校では各校とも、量（生徒数、学科数と教員バランス、予算額等）及び質（学力、教育内容、施設設備、関係者満足度等）の両面において、何らかの問題が顕在化している。

2　社会の変化と多様な進路志望に対応する学科･コース等の在り方（第2専門委員会）

検討課題	具体的な検討項目	検討会議委員からの関連意見
⑥学科･コース等の今後の方向性	【総合学科】	●　専門学科･コース及び総合学科の系列について、これまでの成果を検証するために必要なことは、卒業生の進路先とその経年変化の分析であると考える。本校（木造高校）の場合、昨年度初めて卒業生を出したばかりなので、まだ検証するためのデータは多くはないが、総合学科設置の際の系列決定に過去数年間の卒業生の進路先を十分考慮した。当初専門科目で構成される人間･福祉、流通ビジネス、情報システムの3つの系列を主に選択する人数が6クラス中2クラス（80人）程度と予想していたが、入学生の進路希望は予想以上に大学進学希望が多く、これら3つの系列を主に選択する人数は50人弱にとどまった。そして8割の生徒が普通科目で構成される人文科学、自然科学、社会経済の系列を主に選択する結果となり、これは現在の総合学科4期生までほぼ同じ傾向を示している。また、それに呼応するように卒業生の上級学校進学率（専門学校を含む）も年々上昇し、昨年度は80％を超えることとなった。結果として総合学科と言うよりは、選択科目の多い単位制普通科的な役割を果たしているように感じられる。 　次に課題についてであるが、2つの大きな課題があると思われる。1つは教育課程と選択科目の履修のさせ方である。生徒の進路に必要な科目をいかに効率よく選択できるように教育課程を編成するか、またその選択方法をどのようにして生徒に理解させるかが問題である。もう1つは生徒が適切な科目選択ができるようなキャリアカウンセリングをどのように実施していくかである。総合学科の場合は「産業社会と人間」という科目があるので、「総合的な学習の時間」と連動させながら有効な授業を展開していく必要があると思われる。 ●　総合学科については多分に効果を生んでいるものと評価される。 ●　総合学科について 　本県において、早くから導入した1校（単位制総合学科）について聞きました。卒業生も出し、試行錯誤の段階から抜け出しはしたが、クラス数が少ないために教員数も少なくて、思うように選択科目数をたくさん設定できないのが難点ということでした。また、単位制ではあるが、これから学ぶ高校の授業科目について「生徒に科目を自由に選びなさい」というのは無理があり、総合学科、単位制という理念、特長を十分に活かせていない面がある、ということでした。

2　社会の変化と多様な進路志望に対応する学科･コース等の在り方（第2専門委員会）

検討課題	具体的な検討項目	検討会議委員からの関連意見
⑥学科･コース等の今後の方向性	【総合学科】	●　1　青森中央高校の現状 総合学科は、生徒一人ひとりの個性を尊重し、生徒が意欲的に自分の能力を伸ばそうとする学科であり、指導によって自分の可能性を開花できると思っている。 17年度に校長として本校着任以来、様々な課題に直面しているが、進学も就職もできる総合学科らしい学校に築き上げたいと考えている。また、生徒が本校で充実した3年間を送り、保護者と共に「本校に入学して良かった」と評価される学校を目指している。 本校は、平成15年度より総合学科に改編され、17年度全校が総合学科となった。今春、その1期生が各種の実績を残して巣立った。 生徒の現状は、中学生時代よりコンプレックスを持ち、学校や教師に対する不信感や不安感をもっていたり、社会性が育っていないなど基本的生活に多くの課題がある。本校入学時には明確な将来像を持っている生徒は少なく、進学か就職かさえ決められずにいる。基本的な学力が乏しく、家庭学習はほとんど身に付いていない。また、保護者の教育力や意識も低く、PTA年次部会等の出席者も少ない。 平成12～16年度までの過去5年間の進路状況は、進学面では国公立大学合格者は平均2.8名、進学率は平均19.5%である。就職面では、折からの不況と県内志望が多いことなどでかなり苦戦していた。 総合学科1期生である17年度卒業生の国公立大学合格者は9名(弘前大学3名･県立保健大学3名･青森公立大学3名)、進学率は28.7%、介護福祉士国家試験は11名が全員合格、就職もかなり健闘した。部活動等においても意欲の向上が見られ実績をあげた。本校に対する評価も向上している。 2　青森中央高校の教育計画と課題 ①基礎学力の向上と進路志望達成について ･生徒の多様な進路志望に対応し、特に大学入試や就職試験のためにも基礎学力をつけさせるよう教育課程の見直しをした。また、シラバス内容を充実させ、系列や科目選択に十分時間をかけて指導するなど、生徒が意欲的･積極的に学習ができる学習環境を作る。 ･授業形態や授業内容を工夫し、毎時間の授業を充実させる。少人数授業や習熟度別指導などを取り入れて、学力の向上を図る。そのため、教員配置も改善しつつある。 ･進路志望達成のために、前向きな取り組みをする。学校情報ニュース「旗影嵩く」の発行、面接週間の設定、三者面談の強化などを通して、生徒･保護者･地域の理解を深める工夫をする。 ･学力向上対策委員会において、本校の現状を分析し、具体的対策を考える。 ②自主的･積極的･意欲的な学校生活について ･「産業社会と人間」、インターンシップ、総合的な学習の時間「あすなろ学」を3年計画で実施している。自分自身を考えさせ、興味関心を深め、能力を伸ばし、自分の生き方に自信を持たせ、将来設計が出来るよう指導している。このため、地域や保護者とも連携している。 ･全教職員が、様々な機会を通して、生徒にマナーやモラル、服装容儀などの基本的生活習慣を身に付けさせている。そのため、教職員と生徒との面談や触れ合いの機会を増やしたい。 ･生徒会活動や青中央祭、体育祭、学級レク大会、オープンスクールなどの運営を、生徒がさらに主体的に企画できるよう指導する。 ･部活動においては、県高校総体で優勝種目もあり、インターハイや東北大会に出場している。演劇部は昨年度全国高総文祭演劇部門で最優秀賞、今年は全国優良賞を受賞した。また、韓国演劇協会より招待を受けてソウル公演を実施した。部活動を通して人間性を高揚させ、気力や精神力、忍耐力や協調性、我慢する心を教えたい。部活動をさらに活性化させ、充実した高校生活を送らせたい。 ･これらを有機的に結合させ、基礎学力をつけて推薦入試や就職試験等に挑戦させたい。

2　社会の変化と多様な進路志望に対応する学科･コース等の在り方（第2専門委員会）

検討課題	具体的な検討項目	検討会議委員からの関連意見
⑥学科･コース等の今後の方向性	【共通】	●【基本的な考え方】 　魅力ある高校には、施設･環境の充実と、人材（良き教師）の豊かさが不可欠である。しかし、県財政の窮状や少子高齢化の流れの中で、教育予算の拡充は期待でき　ない。となれば、基本は「スクラップ･アンド･ビルト」であり、「既存の社会資源の活用」である。 ●学科･コース等の今後の方向性 ①各学科･コース及び系列の検証 ･総合学科と違い、専門学科は、著しく変化する社会に対応できる幅広い技術･知識を持ったスペシャリストの育成を目指し、実践的技術を身につけるための専門分野の深化を目的とし、生徒は演習･実習に意欲的に取り組んでいる。資格取得の面においても、システムアドミニストレータ、基本情報技術者試験、日商簿記等の難易度の高い資格を取得するなど成果を上げている。 ･専門分野を学ぶ学科であるにも係わらず、進路意識･目的意識が希薄なまま入学してくる生徒が少なくない。生徒･保護者･中学校の教師に科の特色、学習内容、進路先等が必ずしも理解されていない。 ●　高等学校における職業教育は、職業高校だけで行われるものではなく、すべての人にとって必要な教育であるという観点に立つ必要があると思います。 　そのなかであえて職業高校に望まれることは、「将来のスペシャリスト」として必要とされる「専門性」の基礎･基本の教育に重点を置き、ここで学んだことを基礎に卒業後も職場や大学等の教育機関において継続して教育を受けるなど生涯にわたり専門能力の向上に努めることが重要だと感じます。 　高校を中心に考えると、中学校（将来の職業選択を考慮した上で普通高校、専門高校、総合学科高校）という、将来を考えての第1次の選択、高校で3年間学んだ後の進学･就職･自営（職業選択の決定）という第2次の選択が行われると考えます。 　従来の緩やかな社会変化や産業構造では良かったのかもしれませんが、今日の急激な社会変化と多様な進路志望の結果、生徒の持つ「2つの選択」が、高校（後期中等教育）から大学（高等教育）への進学を考える際、進学準備教育と職業準備教育を逆手に取ったような、学力だけでの輪切りや序列化にすり替えられてきたのではないでしょうか。 　専門高校こそ、「将来の企業の中堅技術や農水産業等、日本の産業経済の発展を根底から支えていく」学校にならなければなならいと考えています。 　一方、青森県の将来を考えた場合、専門高校や総合学科高校卒業生だけが地域産業を支えていくものではなく、普通高校卒業者にも同様に産業に寄与してもらう必要がありますそのようなことからも、普通高校にこそ、将来を踏まえた職業教育の科目の導入が必要かと思います。 そのためには青森県独自で青森県設定科目「（仮称）青森産業学」のようなものが必要かと思います。

2　社会の変化と多様な進路志望に対応する学科･コース等の在り方（第2専門委員会）

検討課題	具体的な検討項目	検討会議委員からの関連意見
⑥学科･コース等の今後の方向性	【共通】	● 青森県の特色を出せる学科を作ることができないか。 ● これから世界で注目されそうな学科を考えることができないでしょうか。 ● 各学科･コース及び系列の検証 ・専門学科は社会の変化に対応する教育内容の充実を図りながら幅広い知識･実践的技術を身につけさせることで、即戦力を育成すると同時に、国家試験等の高度な資格取得を目指させるスペシャリストの育成を行ってきた。また、勤労観･職業観の育成についても成果を挙げてきたと考えられる。ただ、進路意識が希薄なまま、学力に応じた学校･学科選択者が多くなっており、生徒･保護者の各科に対する入学前の理解が必ずしも十分でない。 ● 多様なニーズに合わせて多くのコースが必要かも知れないが、1学科2コースがよいと思う。 ● 進路志望が多様化しているにしても、高卒後の進路志望達成の前提となるのは学力の定着･充実である。従ってどの学科も、普通科目の必要最小限の履修を確保しつつ独自の特色を打ち出した教育に取り組んでおり、大学等進学率の向上等にも一定の役割を果たしていると考える。 ● 各学科が社会のニーズに対応したものであるか否かは、一概には断定できない。企業の人事担当者が高卒者に求めるものは、専門的な技術･能力よりも人間性･協調性･問題意識･コミュニケーション能力等に比重がおかれている。 社会のニーズは重視していかなければならないが、教育について高等学校が果たすべき責任･役割にも限界がある。 ● 1　検証にあたっては、次のことを整理･共通の認識事項としたい。 ･「社会の変化」の内容及び「多様な進路志望」の実態の把握。 ･「高卒者に求められる資質の変化」の認識。 ･「地域の活用可能な資源」の抽出。 2　対応する学科･コース等の検証にあたっては、上記を基にす『選択と集中』を明らかにすることで”特色ある学科･学校”の創造に繋げる。